

## 自然談話に見られる否定疑問文の形式、使用数、相互作用における機能 ポリリー・ザトラウスキー

本研究は、否定疑問文は自然談話でどのように用いられるかについて考察する。田野村(1988 国語学 152:17, 19)の第二類の否定疑問文「ではないか<sub>2</sub>」は推定を表し、「話者は前の表現の内容を否定してはならず、寧ろ、それを認める方に傾いて」おり、「山田じゃない (の) (か) (?)」に示すような形は可能である」と述べている。本研究では、「P (述部) ない」「P じゃん」「P だろう」に研究対象を広げ、機能が「ではないか<sub>2</sub>」に相当するものを考察する。資料は年齢 (30 歳未満, 30 歳以上) と性 (FFF, FFM, FMM, MMM) の 3 人の組み合わせからなる 9 つの自然談話 (約 16 時間) である。考察の観点として 1) 「P ない」「P じゃん」「P だろう」はどのような形式でどのような頻度で用いられるか、2) 相互作用においてどのような機能があるかの 2 点である。従来の研究は、主に研究者の直感、作例、小説やシナリオの例に基づき、否定のほか、確認や同意要求の機能があると指摘しているが、実際の会話で考察している研究は極めて少ない。本研究は「P ない」を含む約 400 の発話の形式と数は若い女性が一番多く、次に若い男性、年上の女性、年上の男性の順で使用率が下がっていた。「P ない」「P じゃん」「P だろう」は自然談話の相互作用において談話の展開と発話連鎖における位置によって、問いかけ、主張、同意要求、前提条件、理由、話題提供、反論等の特徴が見られた。若い男女が「P ない？」を用いた場合はかならずしも同意要求にはならず、主張を表すこともある。若い女性では「P ない？」のうちの「A (形容詞) くない？」が多く用いられた。若い男女によって談話の流れの中で「P ない？」に対する反応が異なっていた。また、若い女性では、一人が「P ない？」を用いた後ほかの若い女性が「P ない？」を用いる一方、年上の女性では「P ない？」に対して相づちによる同意が多かったことから年齢によって同じ形式を異なる機能で用いていることが分かった。本研究により談話の相互作用に焦点を置くことで、相手の発話をモニターしながら自分の描写や評価を変えていく中で動的に意味が作り上げられていることが明確になった。